

出版企画書 「家物語」

～絆を取り戻すある家族の心の旅～

2025年1月14日

文責 八納啓創

●タイトル

家物語

●サブタイトル

絆を取り戻すある家族の心の旅

●コンセプト

コロナを通じて、コロナ DV、コロナ鬱、コロナ離婚などの言葉が流行りましたが、アフターコロナ後もこの4年間における、心の痛みからの回復、家族間での安心感、人生を生きるための不安などを拭い去ることを多くの人が出来ていません。

そういった中、3000人の人生相談に乗りながら「住む人が幸せになる家づくり」を提唱してきた一級建築士が、経験に基づく智慧を、心理カウンセラーである妻との間でこれらの課題に取り組んできてサポートしてきた経験をもとに、「家族の絆」を取り戻すことを体感していただくためにまとめた物語です。

●物語の概要

主人公の荒川真紀は夫健二が勤めている会社の業績不振のあおりを受けて、住んでいる借り上げ社宅に住めなくなることが決定します。戸建てに住みたい真紀とそんな場合でない健二との間で葛藤が生まれます。小学生の娘の真奈美がそんな時に学校とトラブルを起こし、どうしていいか分からずに路頭に迷っている時に、近所で建設中の住宅現場から出てきた建築家矢田啓と出会い、人生について考え始めます。真紀と娘の真奈美との間の絆、夫健二との絆、そしてほぼ絶縁に近い広島在住の父がガンになったことで父との絆を取り戻しながら、真紀自身が最終的に自分自身との絆を取り戻していきます(過去を統合していきます)。最後は、真紀自身が自分の才能に気づき、その才能

を受け入れながら、これからの人生を歩み始めるところで幕を閉じます。人生の謎やからくりが解け、これまでの人生全てに意味があった、多くの人が自分との絆を取り戻すことが出来ずに苦悩していたことが、物語を通じて、同時に癒されていくような構成にしています。

●著者プロフィール

八納啓創 一級建築士 YouTube26万人「幸運すまいチャンネル」運営者。住む家が家族を幸福にも不幸にもする事実を知る。3000人の人生相談と120軒に及ぶ住宅設計を通じて、住まいと家族関係、住まいと運の関係性を探求し、その知恵を体系化。心理カウンセラーの妻とともにYouTube1.5万人「ハッピーファミリーチャンネル」を通じて「家族関係を癒し、情熱100%で生きる」ための情報発信なども行っている。

著書に

わが子を天才に育てる家（PHP 研究所）3刷

住む人が幸せになる家のつくり方（サンマーク出版）初版

住んでいる部屋で運命が決まる！（三笠書房）1万6千部

一流の人はなぜ自分の部屋にこだわるのか？（KADOKAWA）2刷

開運ハウス（KADOKAWA）4刷1万7千部

金運ハウス（KADOKAWA）2025年2月20日発売予定

がある。

一級建築士事務所 株式会社 G proportion アーキテクト 代表取締役

●監修

八納慧果。心理カウンセラー、メンタルコーチ。14年の中高の教諭経験を踏まえ独立。産業カウンセラーを取得。作家の本田健氏と奥様のジュリア氏に師事し、「家族関係、人間関係を癒し情熱100%で生きる」コンテンツを探求。2024年10月には、本田健氏の八ヶ岳のセンターにて二泊三日のワークショップを夫共に成功させた。夫婦で開発した「家族マップ」を使ったオンライン講座やリアルワークショップを開催しながら、人間関係を癒し、自分らしく生きることを提唱している。ライフスタイル・ラボ株式会社 代表取締役

●類書

鏡の法則 野口義則著

野口さんは広島在住の頃私の設計した家の見学会にも来てくださったりとご縁をいただいていた方です。2006年に出版、100万部を超えるベストセラーになった後、10年後に復刻本も出ましたが、その後、家族（親子）を通じて癒しのストーリー本がありません。2025年は、ちょうど**20年近く経ったタイミング**なのとコロナで疲れ切った人間関係や家族関係、親子関係を癒して「絆」を取り戻す好機だと考えています。

●本書の販促や今後のイメージ

・YouTube 幸運すまいチャンネルとハッピーファミリーチャンネルで告知します

・初版の印税を888冊プレゼント企画に回したいと思います。

・全国で10か所以上出版記念講演会を開催して、1000冊以上を販売します

・LINE 読者17000人にも告知します

・プログラム受講生250名に一番の応援隊になってもらいます

・広め隊を集い、300人ぐらいの応援部隊を作り上げます

・メルマガ読者2500名にも告知を続けます

・本書の漫画化または映像化を目指してクラウドファンディングを集めます

●原稿などに関して

全て書き上げたもの（約8万字）がございますが、応募規定に合わせて、プロログ、その1、おわりにだけを抜粋しました。物語なので、区切りをつけるのが難しく9,000文字程度になったことをお詫びいたします。

時代背景に合わせて、10年以上ブラッシュアップを続けて温めてきた原稿です。

目次から、物語の展開を感じ取っていただければ幸いです。

家物語

～絆を取り戻すある家族の心の旅～

八納 啓創

目次

プロローグ

1. きっかけ
2. 夫婦間の価値観の違い
3. ある建築家との出会い
4. 何のために家を建てるの？
5. 30年後を考える
6. 人生を成功させている人たち
7. 三嶋夫婦との出会い
8. 人生について真剣に考えるということ
9. 崩壊
10. 過去の傷
11. 父親
12. 天使
13. 告白
14. 言い合いと話し合い
15. お金の不安
16. お金の知識とお金に対する感情
17. お金の知恵
18. 才能～ギフト～
19. パーティ

エピローグ

おわりに

プロローグ

「どうして世の中には夢をどんどん叶えて人生を幸せに豊かに出来る人とそうでない人がいるのでしょうか？」

500名から入りそうな講演会場は、その問いかけに対して静まり返った。普段は音楽を聞くのに最適な階段状の中ホールは土曜日の午前中にも関わらず、見渡す限りほぼ満席である。夫婦や子連れの参加者が多いようだ。

し〜んと静まり返った会場を見渡ししながら、壇上の矢田啓は聴衆に向かって笑顔で続けた。

「・・・と言われても、それが分かれば苦労は無いですよね！」

白い歯を覗かせた彼の笑顔を見て、聴衆の中にも夫婦で顔を見合わせながら笑う人がチラホラ見える。

白いタートルネックのセーターに黒いコールテン生地ズボン、年の頃は40才近くだろう・・・、あごにはもみ上げまで繋がる刈り込んだ髭をたくわえている。中肉中背の割には背筋が伸びていて、マイクを持って聴衆を見渡しているその姿はなぜだか大きく見える。

「YouTube やインスタグラムなどの SNS などを見ると、どうすれば成功できるか？など情報が溢れています」

矢田は会場を見渡しながら話をつづけた。

「しかし、**実際に夢を叶える人は、ほんのわずかです。不公平だと思いませんか？**」

「では、どうすれば夢を叶えることが出来るのでしょうか？」

「**実は意外に思うかも知れませんが、私が普段手掛けている家づくりのクライアントを見ているとその答えがそこにあると確信しています。**」

そう言いながら、会場のスクリーンに映し出された彼が設計したと思われる家の前で、笑顔で写っている家族の写真が幾つも映し出された。

「これまで相談を含めると 3000 組近くのご家族の相談に乗ってきました。家づくりは人生づくりとも言いますが、私はカウンセラーの次ぐらいに家族の人生相談に乗ってきたのじゃないかと思うくらいです」

矢田はそう言うと、会場の後方に座っている女性に視線を向けて笑顔になりながら頷いた。

「3000 組の家族の人生相談に乗ってきて、分かったことがあります。それは、**どんどん幸せになる人には、ある共通項があったことです。逆に不幸になる人にも共通項があります。しかしほとんどの人がそれらの知識が無いまま人生に翻弄されているのです・・・**」

矢田は、聴衆全ての人に向かって話しかけるように、ステージの右や左に歩いた。聴衆もそれに合わせて彼のその姿を追いかけている。

「人生をよくするための情報を入手し、それを実践することは悪い事じゃありません。しかし、本当にあなたの人生をより良くするために必要なことは、それらの情報にあるのではなく、**もっと根底的なところにある**のです。それは何だと思いませんか？」

矢田はちょうどステージの中央で歩くのを止め、観衆に向き合った。

「私は、家づくりを通じて、人生をより良くしていく家族をたくさんみてきました。そして彼らの家族と触れ合っていくことでどんどん人生が好転していく人たちの共通のエッセンスを見出したのです」

聴衆が、一同に矢田に注目する。

「また、これらの共通のエッセンスは、家づくりにおいても非常に重要な要素

ですが、人生をより良くするという意味では、誰にとっても根底で大切な要素だったのです」

その言葉に対して数組の夫婦らしきパートナーがお互いを見合って微笑んでいる。

「今日、この会場にも数十組程、ともに家を建てたご夫婦にも参加していただいています。彼らと会っていただくと誰でもピンと来るものがあるでしょう」

会場の中で、周りを見渡す人がちらほら見える。その光景を見ながら矢田は続けた。

「これからお話しするセミナーの内容は、彼らと共に家づくりを進めてきたプロセスを体系立てて出来たものです。これらの内容をぜひご家族で話し合ってくださいと思います。それが、皆さんのかけがえのない財産になると私は確信しています」

矢田は、ふっと思い出したかのように言葉を続けた。

「そういえば、最近家を建てたご夫婦にも劇的なドラマがありました。今日はそういった話も交えながら進めましょう」

会場が固唾を呑んで、矢田の次の言葉を待った……

1. きっかけ

「いってらっしゃ〜い！道路が凍っているから気をつけてね！」

小学校2年生の娘を見送る真紀の息は真っ白である。道路が朝日で鏡のようにまぶしく光っている。例年に比べて珍しく東京都内でも正月を終える頃から雪が降り続いた。

そして今日は3学期のスタートである。

荒川真紀は、大手商社に勤める夫の健二と娘の真奈美との3人暮らし。今年で34歳になる専業主婦である。そして今月、妊娠3ヶ月目に入った。真奈美がもう8歳になるから、お腹にいる子とはずいぶんと年が離れている。

それは結婚当初は経済の先行きが不安であったため「子供は一人くらいでいいか」とお互い了解のうえだった。しかし、ここ2年くらいで経済的にも若干余裕が出てきたので、「やっぱりもう一人は欲しいわね。真奈美も一人っ子だとかわいそうだし・・・」と話し合っていたその矢先に真紀は妊娠した。

真奈美も「わたしにおとうとができる！」とあって大はしゃぎだ。まだ男の子が生まれるかどうか分からないが、真奈美は小さな頃からとても直感がするどいから、案外その通りかも知れない。現在は、東京都心から電車で片道30分の住宅街にある英国風のテラスハウスの借り上げ社宅に住んでいる。テラスハウスは日本でいう「庭付きの長屋」みたいなものである。

もともと外国人のために作られた賃貸物件のため、天井は高く、白っぽい外観がおしゃれ感を醸し出していて真紀は気に入っている。最寄の駅から歩いて15分。この近郊で比べるととても便利な地域である。また便利なだけあって家賃もそれなりに高く、2階建てで2LDKのこの住まいで25万円はする。しかし、ありがたいことに健二の会社から6割の15万円の家賃補助がある。

不況の中、健二の会社は主軸である東南アジア企業との取引が上手く進んでいるようで、右肩上がりの成長を見せている。多分、そうでなくてはこれだけ

の家には住めないだろう。先日、マンションを購入した短大時代の友人の住まいに、真紀が趣味でやっている収納のアドバイスをしに行ったときに「会社からそれくらい支給がないと、それだけの賃料は払えないわよね～。真紀のご主人がうらやましいわ～！うちなんかこのマンションのローンでヒーヒー言っているわよ」と言われた。

実際、真紀の故郷の広島では、これくらいの住まいでも家賃は通常9万円くらいで市街地に借りることが出来る。地元の友達は「これで家賃が25万円！！」と目を白黒された。確かに家賃と比べると、60㎡くらいしかない我が家はとても狭い、と真紀はいつも感じていた。1階にお風呂やトイレなどの水周りとキッチンと10畳程のダイニング、そして2階には8畳と6畳の洋室が2つある程度だ。そう考えると60坪(約200㎡)ある広島の真紀の実家とは大違いで、この家の3倍くらいの広さだ。

「・・・でも今年の7月ごろには、2人目の子供が生まれるし、本当にこの家で暮らしていけるのかしら？出来れば前から考えていた私の夢を・・・」ときれいに片付けられたダイニングテーブルに座って婦人雑誌の「あなたにも手が届く！理想の住まいを手に入れた妻たち」という特集を見ながら真紀は考えるのだった。そして何気なくその雑誌をパラパラとめくっていると、真紀はハッとあるページで釘付けになった。

そのページには、真っ白な家の前で家族が笑顔で写っていた。そして「ようやく理想の一戸建ての家を手に入れました。私たち、普通の会社員でも土地付きの家を建てることは可能なんです！」という見出しが出ていた。そして、そこにはこの家を設計したと思わしき建築家の姿もあった。

「うわあ、いいなあ～。やっぱし家は一戸建てよね！土地付きじゃなきゃ！それにしても建築家が建てる家って本当に素敵ね！**私も絶対に建築家に建ててもらいたいわ！**」

ページをめくる手に熱がこもってきた真紀は、子供の頃から土地付きの大きな家に育ってきたせいか、将来は絶対に土地付きの一戸建てに住みたい！と

いう夢があった。また真紀にはアパートに対してアレルギーがあった。それは学生時代、アパートで一人暮らしをしているときに、隣室から急に物音がしたり、電話の話し声が聞こえてきたりと、真紀にとってはとても嫌な思いをしたのだ。そういった思いもあり、真紀の中ではプライバシーがしっかりと保てる一戸建ての住まいが欲しいと心底望んでいた。

しかし**健二の話では、ここ数年の建設費高騰のからみで、中古のマンションを買う同僚が多い**ようだ。そしてマンションを購入した同僚は口をそろえて「家賃を払うくらいなら、中古でもマンションを買ったほうが断然ましさ！」と言っているようだ。それに対してお金に堅実な健二は「中古でもマンションを買うなんて無謀だよ！ましてやローンなんか組むとストレスで、今軌道に乗りかけている仕事の妨げになるだけだよ！」と何かにつけて言っていた。

真紀にとって、ローンがストレスになるという部分は気になったが、マンション暮らしに興味が無かったので、「ふ～ん・・・」と聞き流していたものだ。しかし、**ここ最近妊娠した事もあり、いよいよ健二に「私の夢・・・マイホームプロジェクト」を打ち明けようと真紀は考えていた。**ただ、真紀は健二とそんな話をするのも最近は稀である。

なぜなら健二が会社で半年前から取り組んでいる「オーガニックフードプロジェクト」の主任に抜擢されてから、全国の農家を廻るために月に2週間ほど出張し、そして帰宅する時でもほぼ終電だからだ。娘の真奈美も健二とほとんど話をしていない・・・、最近家は家にもクタクタになって寝ている健二の姿が真紀の脳裏に浮かんだ。

(そういえば、私も健二とほとんど話をしていないわ・・・) 真紀がこの数週間まともに話をしていない健二のことを考えていると、学校から真奈美が帰ってきた。

「あら、おかえり！学校はどうだった？」と声をかける真紀だが、真奈美の反応がちよっと悪いことに気がついた。

「学校で何かあったの？」

「・・・ううん、べつに。ひさしぶりに学校にいった、なんだかつかれただけよ」と真奈美は気のない返事をした。

「でも、暗い顔をしてるわね。喧嘩でもしたの？」

「・・・もう、うるさいわね！そんなにきかないでよ！」真奈美はバタンとドアを閉め、自分の部屋に入ったのだった。その様子を見て真紀は呆気にとられた。

「いつからあんなふうになったのだろう・・・？」最近の真奈美の反応を見るたびに、**真紀の心のなかにずしりと重い何かのしかかってくる。そして真紀はそれをつかみ出そうとするように胸の辺りに手をあてた。**

「ああダメダメ、こんなふうには落ち込んでいては！」頭を何度も横に降りながら真紀は自分に言い聞かせた。

こういった時にはいつも明るく振舞っていた母親のことを思い出し、「自分もそうならなければ！」と真紀は思うのだった。真紀の母親はいつも悲観的だった父親とは対照的にいつも明るく振舞っていた。真紀はそんな母親が大好きだった。

昼の3時をまわったころ、「としょかんに行ってくる。」と真奈美が言って部屋から出てきた。歩いて3分の距離にある区民図書館には真奈美が大好きな世界の絵本が沢山あり、彼女はそれを見ながら絵を描くのが好きだった。**その時、彼女の顔色が思ったより良くなっていて真紀はホッとした。**

「じゃ、夕方には帰ってきてね。ママもそのころまでには夕食の買い物に行っておくから」真紀はそう言って娘を見送った。

「今日は、健二も久々に早く帰れるって言っていたし、真奈美のさっきの様子も不安だわ・・・よし！今晚は皆が好きな、手製ハンバーグとアボガドと新鮮でプリプリな海老の入ったサラダにして、元気になってもらおう！」真紀は普段

帰りの遅い健二と一緒に家族で食事が出来ることに久々の喜びを感じながら、歩いて10分のスーパーに買い物に出かけた。

そしてその帰り、**真紀は何気なくいつも歩いている公園の表通りから反対側にある閑静な裏通りが目に入った。**そしていつも同じ道だと気分が滅入るので気分転換しよう！と思い裏道から帰ることにしたのだ。

(たまに、こうやって違う道を通るのもいいものね・・・)と真紀はいつもと違う景色を楽しみながら歩いていると、「あれ？あんなところに建設中の家があるわ」夕日で薄暗くなる町並みに、白い工事用のシートでおおわれた工事現場が目に入った。よくみると、工事現場には所狭しと人が出入りしているのが見える。

「へえ～、ここはちょっと前までは空き地だったから、どなたかが新しく引っ越してくるのね！敷地はあまり大きくなかったから3階建てでも建てるのかしら？」真紀がそんなことを思っていると、工事現場から一人の男性が出てきた。

中肉中背のその男性は、現場から出てきたのにも関わらず、黒いズボンにハイネックの白いセーターを着て、工事用のヘルメットはかぶっているが見た目はデザイナーのようだった。良く見るとあごには短く刈ったヒゲが奇麗にはえている。

(わあ～、この人ってもしかして建築家なのかしら？)

昼ごろに読んでいた婦人雑誌に登場していた建築家の姿とダブった。真紀が思わずじっと見ていると、向こうも気付いたらしく、こっちを見てニコッと会釈をして、また現場の中に入っていった。その現場をよく見ると「2月末竣工予定！」と看板を掲げていた。

(うわあ～、いいなあ。もう少しで完成なのね！私も家を建てるなら、やっぱり建築家に建ててもらいたいなあ～。そうだわ！**これも何かのきっかけだか**

ら、今日、私の夢を健二に話してみよう！）真紀は高まる気持ちを感じながら、その家の前をあとにした。

夜7時には夫の健二も帰ってきた。本当に平日の夜に家族団らんで食事するのは久しぶりで、真奈美もとても嬉しそうである。そして真紀はみんなの大好きな手作りハンバーグとサラダをテーブルに並べて食卓についた。

図書館から帰ってきた真奈美の表情はいつものように明るくなっていたのであまり気にならなくなったが、**それとは逆に夫の健二の表情がちょっと暗いことに気がついた。**

「あら、せっかくみんなの大好物を並べているのにどうしたの？暗い顔しちゃって！」真紀は明るく振舞い、健二に話しかけた。

「・・・ああ、そうだね。大好物のハンバーグだ！真奈美、良かったな！じゃ、皆で食べようか」雰囲気を感じた健二がそれに答えた。

久しぶりに家族団らんで食事をしているはずなのに、あまり会話が弾まない。健二は、心ここにあらずという感じで生返事を繰り返すばかりだった。

そして真奈美が布団に入った9時ころ、真紀は片付いたダイニングテーブルに、健二のために軽く赤ワインを注いだ。赤ワインを飲むときにはいつもご機嫌のはずなのに、やはり健二の顔色が冴えない。

「・・・やっぱり、会社で何かあったの？何だか上の空だし」今日考えていた夢を打ち明けようと心に決めていた真紀にとってなかなか話し出すきっかけがつかめず、どうしようかと思っていると、健二がようやく重い口を開いた。

「・・・うん・・・**今会社で進めているオーガニックフードプロジェクトだけどね・・・実は暗礁に乗り上げそうなんだ。**もしかしたら、このプロジェクト自体、近々に打ち切られる可能が出てきてね・・・」健二は、大きなため息と共にうつむき加減でワイングラスを眺めている。

「そうなの。せっかくこの半年間頑張ってきたのに残念ね・・・」真紀は自分が考えていた事とぜんぜん違う内容だったので、どういけばいいのか分からず戸惑いながら体裁を整えようとした。

「もちろん僕も残念だよ。身を粉にしてきたプロジェクトだったからね。出張ばかりで真紀たちにも悪いことをしたなあと思っていたし・・・、**でも事態はもっと深刻なんだよ。真紀**」

「どういうことなの？健二」

「うん・・・、このプロジェクトの主任である僕は、多分確実に減給処分だろうね。そうしないと会社も他の社員に示しがつかないだろうし・・・」

「ええっ！減給になるの？どうしてあなたがそこまで責任を背負わなきゃいけないのよ！もうすぐしたら二人目も生まれるのよ！今、妊娠3ヶ月なのよ！」健二のワイングラスのワインがこぼれそうな勢いで真紀はいった。

「おいおい、急にそんなに感情的になるなよ！確かに僕の推測する範囲だから決定では無いけど、多分今回のボーナスは確実に厳しいな・・・。それと今回のプロジェクトの影響で**会社全体としても借り上げ社宅に対する住宅補助制度の見直しがあるかも知れない。これが僕らには一番つらいかな**」と頭をぼりぼりとかきながら健二。

確かに、今のところ大きなローンなどは一切ない。だからボーナスが下がっても、冷静に考えれば残念だけどそれほど痛手はない。しかし住宅補助がなくなれば、今住んでいるこの家には当然住めなくなるのは確実だ。しかし**この現実以上に真紀にとってもっとショックだったのは「マイホーム」という自分の夢がガラガラと音を建てて崩れ去っていく可能性があることだ。**

「それが・・・本当だったら、いろいろと考えないといけないわ。あなたはもう思うの？」軽く深呼吸をして真紀はどうにか冷静を保った。

「う～ん、今までこんなこと考えもしなかったからなあ。すぐには思いつかないよ」健二はワイングラスに自分でワインを注いだ。

「・・・でも私たちはどうなるの？それはいつはっきり分かるの！？」健二の煮え切らない態度に真紀の中で急に不安の気持ちが大きくなった。

「ちょっと待ってくれよ。こっちは今まで会社のためにと、懸命に努力してきたんだぜ！お前にまでに今、責め立てられると、たまったもんじゃないよ！」

「私が聞きたいのは会社のための話じゃないわ！私たち家族にとってどうなるかって話なのよ！もっとしっかりしてよ！」

「・・・分かった。どうにかして明日に会社に探りを入れてみるよ・・・」健二は赤ワインを飲み干して、ハアと深いため息をついた。

健二は東京でもそれなりに名前の通っている大学を卒業して大手商社に入社した。ある意味エリートコースを歩んでいるサラリーマンである。これまで仙台・名古屋・大阪・福岡と2年ごとに転勤を繰り返してきた。そして、2年前から東京の本社勤務となり、半年前に今取り組んでいるプロジェクトの主任となったのであった。同世代には「会社は会社だよ」と割り切っている連中も多いなか、健二は「俺はこの会社で絶対にトップまで登りつめて成功してやる！」と出世コースを歩んでいたのだが、その分、身を粉にして働いていた。

それに対して広島出身の真紀は東京にある英文科の短期学校を卒業し数年間OLを経験。そして入社4年目に健二と結婚した。

健二と真紀の出会いは、学生時代に参加していたテニスサークルがきっかけだった。真紀はその当時大手商社に勤めていた健二と結婚したことで、周りから「玉の輿～！」と言われ、心の中では嬉しい反面、とてもプレッシャーを感じた。

なぜなら、**真紀は健二に対して、学歴コンプレックスを感じていた**からだ。会社でガンガン仕事している健二を見ていると、どうしても真紀は健二に対して「彼は出来る人、私は出来ない人」というイメージが頭から拭えない。また最近**は健二が多忙のせい**か、たまに話をしても話がかみ合わないことが増えてきている。

（最近**は特にちょっとした些細なことでも言い合いになってしまう**。このままではいけない！）と真紀は思いつつも普段帰りの遅い健二をみるとそのイライラを止めることが出来なかった。

そんな悪循環のなかでの今回の健二の話だった。

そして、それから2週間後の一月末。正式に会社からの通達が出た。

その内容は、オーガニックフードプロジェクトの打ち切りによるチームの解散、それにとまなう部署の移動。かろうじて健二は東京の本社での勤務になったがボーナス80%削減、**そしてプロジェクトが会社に及ぼした損失で福利厚生関係が見直され住宅補助が一律月5万円**。それが今年の4月から急遽、適用されることになりそうだ。

真紀の思いの中で、**家づくりの夢がガラガラと音をたてて崩れていく**のを感じた。

（以降、2 夫婦間の価値観の違いにつづく）

おわりに

最後までごらんいただき、ありがとうございました。

この原稿は10数年前に書き上げ、2、3年に一度内容をブラッシュアップしながら、温めてきたものです。

そして毎回読み直すたびに、私自身が涙を流してしまいます。

本書を通じてまだまだ人とそして自分自身の絆を取り戻さないといけないことがあるんだと実感しています。

これまでたくさんのメンターや仲間に出会って、人生が激変してきた体験のもとに、私が普段している家づくりで得た経験や心理カウンセラーで妻の八納慧果とともにこの20年間培ってきた経験をこのような形で分かち合えたことはこれ以上ない喜びです。

妻とともに私たちが実感しているのは、「家族というものは、お互いに本来の自分を思い出し、労い合いながら幸せな人生を生きるための最高の環境だ」ということです。

このように言うと、「そんなの無理!」「そんなふうには思えない」という声も聞こえてきそうです。

本書の荒川夫妻も初めはそうでした。

そして矢田夫妻も当初はそうだったに違いありません。

しかし、メンターや仲間、そして人生において「ピンチ!」と思わるときに、親やパートナーと向き合う勇気をふり絞れば、嵐で全く見通しの立たなかった荒海が、穏やかな湖のような穏やかな水面になるがごとく、風通しも良く心から応援し合える家族になることができます。

ときおり、嵐が来るのは世の常なので、全くなくなるわけではない（逆に激しくなる!？）ですが、一度穏やかな湖面の状態を体験することが出来れば、メ

ンターや仲間の力を借りながら、持続することが可能になります。

荒川夫妻もこの後再び嵐が吹き荒れる可能性もあるでしょう。
しかし、今回の経験が必ず今後の人生の役に立つと確信しています。

この本は、私たちが最も伝えたいことをまとめ上げた魂の一冊です。

本書を通じて、矢田夫妻や三嶋夫妻、荒川夫妻のような家族が繋がる世界が広がることを心から祈っています。

吹き抜けのある2階のリビングにて

八納啓創